

## (仮称) 八戸市文化芸術推進基本計画案 (令和 2 年 5 月版) への意見

### (多文化都市八戸推進懇談会委員)

※委員からの意見については、原文ではなく、抄訳、あるいは意識し掲載しています。

また、意見の一部については事務局の判断で、委員が指定した施策とは別の施策に意見として掲載している場合があります。

#### 戦略 1 文化芸術の創造・発展・継承と教育

##### ◎施策 A 文化芸術の創造・発展・継承

「創造」という言葉が良く出てくるが、文化活動自体が全て研究であるという考えから、「研究」としてはどうか？また、文化芸術は「創造」の前には「見る」などの学ぶ期間 (=研究) が必要であり、八戸は地域全体で見ると、まだ学ぶ段階にあると思う。戦略 2 以降であれば戦略 1 の段階を踏むので、「創造」で違和感がなくなる。

各種芸術文化の公演の鑑賞機会の拡充が必要である。(ニーズと合致しているかの検討も必要である)

文化協会等の文化活動を行っている団体・サークルの育成事業及び指導者の確保への支援が必要である。

施設間連携について、例えばウォークラリーの開催やレンタサイクルを整備し、回遊することに対する意欲を刺激することで施設間連携を促進する。

施設間連携のほか、各施設の役割の違いを明確にするのも大切である。

新美術館のオープンを控えているが、市の施設毎のミッションや役割も示すべきではないか。市民はほとんど分からない = 興味を持ってもらえない = 裾野が広がらない、と思う。

アーカイブ化への取組について、パソコンやスマートフォン等の市民が日常生活で使用しているデバイスを活用することで、文化芸術をより身近に感じることができることから、「インターネットの活用」を明記してはどうか。

アーカイブ化への取組について、作品等のみでは作品の安易なデータベース化になってしまう恐れがあるため、展覧会等の企画内容の提供も含め、利用者が気軽に施設の活動について知ることができる取組として、「地域・活動等のアーカイブ化」としてほうがよい。

## 戦略 1 文化芸術の創造・発展・継承と教育

### ◎施策 B 文化財の保存・継承・発揚

祭、民俗芸能について、官民力合わせての近年の観光資源としての充実ぶりには敬意を表したい。ただ、実態は時代のニーズ、少子高齢化を受け、存続困難な状況が益々深刻化していく恐れがある。祭や各民俗芸能団体の現状をまずしっかり把握して、存続のためにどのような手立てがあるのか、官民知恵を出し合うことが求められている。

縄文文化への理解を深める取組も大切だが、是川縄文館の景観とその周辺の建物や看板の兼ね合いなど、飛鳥地区のように地域一帯で文化を感じることができる美観地区の整備という文言が入るとよい。

基本的な施策に「伝統文化の普及・PR」を追加し、三社大祭やえんぶりだけに着目するのではなく、市内各神社やお寺で行われている伝統的な祭りや、「七夕まつり」「菊まつり」などにも焦点を当てる必要がある。

### ◎施策 C 文化芸術教育の充実

学校教育における鑑賞・体験の機会の提供について、教育現場としては授業時間数的に厳しいほか、移動手段がないあるいはバスの借上料が高額であるほか、借りることができる文化施設が少ないのが現実である。

例えば、劇団四季の公演については、近隣の徒歩で行ける学校しか参加できないため、交通費等の補助があれば参加できる学校も増えるのではないかと。

方言（南部弁）を文化として捉えたことを評価したい。全国各地で行われている文化庁主催の「危機的状況にある言語、方言サミット」に参加しているが、地域消滅・崩壊を防ぐツールとして、方言が益々大きな役割を担っていることを実感している。

方言は無形文化財、民俗学の分類になると思うが、地域の方言が文化財という認識が一般に薄かったと思うので、これからのものとして施策の対象に入れることは良いと考える。また、保存・継承だけでなく、地域の歴史や文化と関係した方向で、小井川潤次郎氏の資料も活用しながら研究が進むとよい。例えば、八戸は狭い範囲で内陸部と浜地区と中心街の方言が異なっていて、研究を期待している分野である。

南部弁関係の取組は積極的に行われていると思うが、情報を取りまとめる窓口がなく、取組や展示、資料などを一元的に取りまとめる役割を市が果たしてほしい。

施策Cについては、「本」の枠からでた「言語」としての施策も求められるのではないかと。したがって、ブックセンターを始めとした現在の取組に加え、もう少し広い視野に基づく取組が必要ではないかと。

## 戦略 1 文化芸術の創造・発展・継承と教育

### ◎施策 C 文化芸術教育の充実

ブックセンターについて、市民（カンヅメブース利用者等）が執筆した本を取り上げる取組が不足している。

施策 C は「義務教育期間中の～」とあるが高校生まで含めた方がよい。また、高校生までを対象とした施策であるならば、「本のまち」の取組は施策 A に位置づけたほうがよいのではないか。

「言語」にターゲットを絞る中で「南部弁」が取り上げられているが、文化芸術教育の充実として、南部弁だけが特筆されているように見える。「現在の取組」でこの箇所だけ南部弁に係る民間の取組が取り上げられていることも含め、違和感がある。今後の取組の一項目として「南部弁」が取り上げられることなら分かるが。

### ◎施策 A・C

芸術家への支援について、表現が不明瞭である。例えば「若手」や「評価の定まっていない芸術家」の発掘と支援など、今不足していることを盛り込んでほしい。

また、施策 C を実現するためには、施策 A の充実と発展が欠かせないが、これらを実現するには人材（プレイヤーではなく支える人材）の育成が欠かせないが、これまではそれができていると思えないし、現在取り組んでいる事業では根本的な改善は難しいと思う。どのようにしてその部分を実現するのか。

## 戦略 2 文化芸術によるイノベーション

### ◎施策 A 文化芸術のイノベーション

新しい価値を生み出すため、市民活動団体や個人とアーティスト・クリエイターが協力して行う事業に対し、補助金等による支援を充実させるとともに、既存の補助金を含め、補助制度の周知により、応募を増加し競争させ、計画の目標達成に資するアイデアを採択することで、各活動を活気あるものとするところができるのではないかと。

多文化補助の金額が少ない⇒利用する企画が少ない⇒認知度が低い、周知の限界という悪循環。細かい企画をあちこち支援しても全体の底上げにならない。個人単位ではできない規模の大胆な支援を期待したい。

個別の周知が難しい点を解消する例として、「八戸市文化芸術祭」「八戸アートウィーク」などと称し、期間中、開催されるものを一挙に知らせる、場所も、はちちのような公共施設だけでなく、企業や一般の商店、個人のアトリエなども公開し、地域全体でアートムード一色となれるような企画の検討。併せて、飲食業や製造業の企画商品の展開。八戸市文化協会・八戸ファンタジーとの連携。WELL、come などとの連携など。

地域課題の解決には地域住民が主体的に関わることが不可欠であり、アートプロジェクトなどの推進・支援充実のほか、地域住民の意識改革の機会を創出することが必要である。

既存の形の文化芸術ばかりではなく、未来の文化芸術活動の認識・新しい形での文化芸術の融合の表現を認識し、柔軟に受け入れる努力が必要である。

### ◎施策 B 暮らしの文化に関する産業やマーケットの育成

郷土の衣食住文化を体系化して捉えなおすという観点はとても重要である。短期的には観光や産業・マーケットの育成の分野の中で活性化できる取組も有効だが、中・長期的観点では、戦略 1 の施策 B に位置付け、文化財法の観点から調査・研究が必要。

食文化の例示としてせんべい汁、クジラ等とあるが、水産都市として「いちご煮」は欠かせないと思う。

### ◎施策 C 地域文化や文化財等を活用した観光コンテンツの充実

南郷ジャズフェスティバルについて、担当課が南郷事務所のままでいいのか再検討すべき時期。また、関わる市民がより主体的に取り組めるような仕組みを市が提示する必要がある。

VISIT はちのへの HP が良いと思うので、アクセス推移等から今後どのようなプロモーションをするか、発信方法を検討する。また、外国からの観光誘致のための取組も含めて検討する。

(八戸国際交流協会や VISIT はちのへの連携による八戸在住の外国人によるレポートや、祭りの YouTube 発信 (字幕協力含む) 等。)

## 戦略2 文化芸術によるイノベーション

### ◎施策C 地域文化や文化財等を活用した観光コンテンツの充実

観光コンテンツのデジタル化による情報発信について、分かりやすさが欠けている。「八戸観光」で検索しただけですぐに八戸市の魅力を知ることができるようなものが必要。

## 戦略3 多様な価値観の形成と社会包摂の推進

### ◎施策A 文化芸術に誰もが触れられる環境整備

高齢者が文化芸術に親しむことができる環境整備として、

- ・生きがいを見出せる文化芸術活動の促進。
- ・高齢者の興味関心に応じた学習の場及び発表機会を提供する。
- ・高齢者が持つ豊かな経験や知識等を地域の文化芸術に生かされるよう努める。

子どもや子育て中の保護者が文化芸術に親しむことができる環境整備として、

- ・感性や創造性、情緒の発達など心身の発達の基盤を育むうえで、乳幼児期・児童期・青年期において文化芸術にふれることの重要性を知る。
- ・生涯にわたって文化芸術への興味・関心を高め親しむきっかけとなるよう環境を整備する。
- ・親子で参加できる機会の拡充を図るとともに、子育て中に保護者が芸術を鑑賞したり、創造したりしやすい環境を整備する。

バリアフリー化について、物理的な障害だけではなくヘルプマークやオストメイトなどの普及も含めた環境づくりが必要である。

### ◎施策C 祭りなどの社会包摂機能を持つ文化の継承と振興

はっちのDASHIJINプロジェクトは、三社大祭を新しい角度から発信する素晴らしい企画だが、参加者は山車組関係者が中心のため、三社大祭やえんぶりについて、まずは関わる市民を増やすことが必要である。浴衣を揃えたり、笛を買うにも、山車小屋に足を運ぶにも、参加することに対するハードルが高いため、「市民が電話1本で参加できる仕組み」や「ネットですぐ参加できる仕組み」を構築することが、今後継承のために必要。

中居林神楽では活動資金が足りず、大変苦しい状況にあると聞いている。笹の葉踊りや高館駒踊り、虎舞、神楽など三社大祭やえんぶり以外の伝統芸能にも積極的に焦点を当て、関わる市民を増やす仕組みを整備する。

「祭りなどの社会包摂機能を持つ文化」という表現は適切なのか疑問。文化芸術を語る上での新しいキーワードだと思うが、「地域社会の一員として誰でも～」という表現が適切ではないか。

### ◎施策A・B

マイノリティのための環境整備をしてあげるというニュアンスが感じられる。骨格にも「心豊かで多様性を認め合う」と書かれており、多様な価値観を知ること自身も成長できるという観点も含まれているように思う。その観点を入れることで一層全ての人に関係がある項目となる。「価値観を受け入れられる」ではなく、「価値観を共有できる」の方がよい。

## 戦略 4 国際文化交流の推進

### ◎施策 A 国際文化交流に資する文化施策の推進

種差海岸・ユネスコ・是川縄文遺跡を八戸市の国際ブランドの一つとして、統一感を持たせたブランディングが必要である。

### ◎施策 B 文化施設、国立公園、観光資源等における多言語化対応の推進

文化施設などの多言語化については、急務であり、IT 技術の活用により短期で解決できるものを含めて検討する必要がある。

多言語化については、現段階で英語表記がある施設も多いが翻訳があっているのか精査する必要がある。また、市内で使われるピクトグラムの一貫性や音声翻訳機の導入も検討すべきである。

### ◎施策 C 質の高い日本語教育の提供

八戸市や近隣に住む英語圏出身の人々が独自にコミュニティをつくり、互いに協力してその地域で生活している状況であり、地域に住む外国人を地域が受け入れる環境・仕組みなど、市民が関わって行けるような取組が必要である。

## 戦略5 専門的人材の確保・育成

### ◎施策A 人材の確保・育成

文化の専門人材の確保・育成はもちろんであるが、安心して活動できるような長期的な雇用環境の整備が必要である。

文化芸術団体の指導者等と連携しながら、研修の充実や人材情報の整備・提供等に努める必要がある。 →アーティストバンクの整備、県内・市内の芸術家の紹介、アーティストの文化事業の促進など。

芸能文化をはじめ、文化芸術活動全般で伝承者の高齢化・後継者不足による衰退が問題であるため、後継者の育成へ早急に対策するべき。

「必要とされる人材の見える化」のほかに、学芸員等の現在の人材が持つ専門分野・研究分野の把握が必要である。

### ◎施策B 文化ボランティアの育成

民間の文化施設やイベント実施団体がボランティア参加者を必要としていないか、また、そのような施設や団体のボランティアも行うことで、参加者のやりがいの向上につながらないかの検討が必要である。

### ◎施策A～C

現在取り組んでいる事業が後継や伝承に役立っているか検証が必要。また、興味のある人が足を運ぶだけの取組では、文化に触れる機会を強化したとは言えない。様々な年代の人が集う場所（ショッピングセンター等）に出向いていく等の工夫により、活動に対して興味関心を持たせることや後継者不足等の活動団体が抱える問題に対する理解へつながるような取組が必要である。



## 戦略6 連携・協議を推進するプラットフォームづくり

### 施策A プラットフォームづくり

プラットフォームの意味が分からない。

市民へのアンケートの結果として、行政や民間が取り組むべき事柄として明確になった「イベント・活動の情報提供」の充実について明示する必要がある。

各文化団体と教育機関（学校）との連携を深めたい。特に、民俗芸能はそれなくしては消滅する恐れがある。

### 施策B 寄付等支援制度の充実

地域を意識したメセナ活動をなんとかしたい。官だけに頼るのではなく、地域全体で盛り上げる雰囲気欲しい。そのためには、文化活動に協力した企業が、高い評価を得られるような方策の検討が必要である。

企業が文化活動を支援するほかに、企業が積極的に文化事業に「参入」することが効果的だと思う。企業参加のメリットをとらえて広げることで、三社大祭をはじめとした文化事業への参加を促せるのではないかな。

企業が「こんな取組をしている」ということが見える、あるいは誰と共同して、どのような手順で何が出来上がったかなど一連の流れが見える仕組みが出来れば、文化を支援する企業文化が育つのではないかな。

## その他

### ◎目指す都市の姿について

八戸の目指す都市の姿について、「文化芸術政策が身近にあふれる都市」と「創造的で活力あるクリエイティブな都市」、また、「心豊かで多様性を認め合う共生都市」と「多彩な文化コミュニティが息づく都市」はそれぞれ同じことを言っているように見える。違いがあったとしても分かりにくく、記憶に残りにくいいため、もっとシンプルで明快な表現にまとめてみてはどうか。また、その代わりに「この土地ならではの文化や暮らしを守り伝える都市」という観点が必要ではないか。

### ◎戦略について

すっきりまとまっていて分かり易い。

これでよい。

6つ細かく分けて掘り下げたことは評価。総花的になるのではなく、それぞれの分野に理解をとりつつ、毎年度対象を絞って取り組むことが必要。

### ◎課題等の整理について（全体的なこと）

課題について具体的に、かつ、分かりやすく記述してほしい。

今の時代、それぞれの分野を個別に考えるのではなく、市民生活や観光等とどう結びつけて発展させるかという観点が必要かもしれない。自己満足だけでは衰退する時勢で、市民参加型という観点が益々必要になってくると思う。

### ◎今後の在り方について（全体的なこと）

戦略のピックアップが重要。戦略がしっかり把握できていれば、自ずと施策を練ることができる。

### ◎全体に関すること（構成や表現など）

文化芸術に関心のある市民とそうでない市民の意識の差が大きい。文化芸術を自身の関心ごととして捉える人を増やし、より一層の推進を目指したいのであればより分かりやすい形で方向性を示し、それにかかわる市職員・市民が同じ意識をもって目標に向かっていくような、一つの明確なゴールが必要である。

前回のアンケートに基づいて具体的対策をどのように練ったのかプレゼンしてほしい。

項目が多いので、その年度の目標を定めてはどうか。

水産都市八戸としてのPR、縄文文化の理解、南部藩の歴史や地元のお祭り等に取り組むことが大切。

難しい言葉をもう少しわかりやすく表現してもよい。

## その他

### ◎全体に関すること（構成や表現など）

あいちトリエンナーレで問題となったような、表現の自由と税金の使用の問題。問題提起がアートの基本概念であり、官が主体となって支援というとき、大きな壁が立ちはだかる。こういう課題を予め文化芸術の教育の場面で取り上げられたらよいと思う。

目指す都市像や各戦略の目指すゴールもよく分かるが、計画によって最終的に市民生活にどのような恩恵をもたらしたいのかがよく分からない。

「歴史」という用語が少ない。もう少し「歴史」という用語を使うことで、歴史に興味のある市民にも本計画のメッセージを伝えられるのではないか。

教育といえば子ども、生涯学習と言えば高齢者、観光といえば市外の人々との印象が強く、これらターゲットへの取組は多く行われている。しかし、最も影響力があり、最も文化芸術を楽しむ能力を持っていながら、最も離れてしまっている市内の成人・大人をターゲットにした施策も必要。

八戸市のめざす都市の姿は、「多文化推進について」でも述べられているように、その土台は「多種多様な分野で市民の自主的で特色のある文化活動」によって成り立っている。そうであるなら、行政機関である「八戸市がめざす」ではなく、本来「八戸市民がめざす」というのが理想である。しかし、取り上げられている事業の主体はほぼ行政である。各行政機関の事業の実施にあっては、民間と連携した取組もあるだろうが、一部の民間に偏り、また、事業自体は行政が考えたプランに民間が協力するという形や、民間の要望を事業化するという形で、対等な立場での「連携」や「協働」にはなっていないことも多くある。しかし、市民の自主的で特色のある文化活動の振興のためには、この計画、骨格、戦略と自身の活動を関連付け取り組んでいければ、全体として多くの市民がその恩恵を受け、目指す都市の姿の底上げができるのではないか。そこでそのための試みとして、各既存の活動又は団体に、この基本計画の戦略・施策に対し、自身の活動がどの程度関連性がある、あるいは何を重視しているかなどを数値化してもらい、その活動・団体の紹介のひとつとして周知し、毎年度更新していくのはどうか。これにより、自身の活動の自己検証の機会にもなり、また団体間の認知もジャンルを超えて明らかになり、外からは分かり難い、活動主体の考えや可能性も浮かび上がるのではないか。ただし、計画に統制されるのではなく、逆に基本計画をみんなで改善するようなイメージがいいと思う。いずれにしても、市民がこの計画を自分事として関わっていける仕掛けが必要だと思う。

## その他

### ◎計画の内容に入っていない項目

郷土資料の保存と伝承を推進し、活用の拡充を図ることが必要。

市史編纂について、編纂が終わったからこそ、次にそれをどう活かすかについて、基本計画で取り上げるべき。